

指示副詞サとサ系連語 －指示性と一語化を中心に－

鈴木 芳明

1 はじめに

本稿は、まず、指示副詞サの指示性を明らかにし、次にサを語構成要素にもつ連語の一語化をサの指示性と関連づけて考察する。サに下接する助辞に注目して連語を品詞論的に整理してみたい。

サを取り上げたのは、それが、和文に頻用され、様々な連語を構成し、文章の展開に重要な役割を果たすと考えたからである。サは、単独で用言を修飾する場合と様々な助辞を伴って連語をつくる場合とがある。サを語構成要素にもつ連語をサ系連語と呼ぶ。サ系連語は、サに存在詞アリが融合するか否かでサ類とサリ類に下位分類される。

用例の調査に使用した文献とその底本を、以下に簡略に示す。なお()に特に記した以外は、岩波書店の日本古典文学大系を用いた。用例の表記を一部私意に改めた。

『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『大和物語』『大和物語附載説話』『平中物語』『落窪物語』『多武峯少将物語』(小久保崇明編)『宇津保物語』(室城秀之編『うつほ物語全』)『蜻蛉日記』『篁物語』『枕草子』『源氏物語』(小学館・古典文学全集)『和泉式部日記』『紫式部日記』『栄花物語』『堤中納言物語』『更級日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『法華百座聞書抄』(小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』)『打聞集』(東辻保和著『打聞集の研究と総索引』)『今昔物語集』『古本説話集』(山内洋一郎編『古本説話集総索引』)『大鏡』『方丈記』『発心集』(高尾稔／長嶋正久編『発心集 本文・自立語索引』)『宇治拾遺物語』『平家物語』『徒然草』『増鏡』

2 サの指示性

2.1 コト指示とモノ指示

指示詞の問題は佐久間鼎 1936 以来、数多く取り上げられてきているが、その多くはいわゆるコソアドに関するものであり、サを中心に論じたものはさほど多くない。知り得た限りでは、原田芳起 1952・清水功 1974・井上博嗣 1999 などがあげられる。

サは指示副詞と呼ばれ、文脈指示と連用修飾をその職能とするものである。ただ

し、文脈指示という用語は、後述するような問題点があるので、サの指示性を明確にするために、ここで新たに、〈コトの様相的指示〉という用語を使うことにする。〈コトの様相的指示〉とは、先行の発話や行為を様相的に指し示すものであり、モノそのものを指し示す指示代名詞の指示の仕方とは異なるものである。以下、指示代名詞の指示の仕方を〈モノ指示〉とする。「様相的」と「コト」は井上1999を参考にした。

話を分かり易くするために現代語による作例を示す。

- (1) 新しいパソコンを買った。それで書いたのがこの論文だ。
- (2) 新しいパソコンを買った。それで金がなくなった。
- (3) 新しいパソコンを買いたい。そう思うけど金がない。

(1)の「それ」は「パソコンそのもの」を指し示す〈モノ指示〉の例、(2)と(3)は、〈コト指示〉の例である。〈コト指示〉は、二種に分けられる。(2)の「それ」は、「パソコンを買ったこと」を直接に指し示す〈コトの直接指示〉の例である。(3)の「そう」は、「パソコンを買いたいように」と解され、これを〈コトの様相的指示〉とする。なお、「買いたいように」は「買いたく」「買いたいと」などとも言い換え可能であるが、先行するコトの対象化と連用というサのふたつの働きをより明確に示すために「買いたいように！」とした。「買いたいというように」としてもよいだろう。指示詞の対象化機能は引用のトとも通ずるものと思われる。(2)と(3)を次のように言い換えれば、〈コト指示〉の下位分類二種の別が明らかになる。

- (4) 新しいパソコンを買ったことで金がなくなった。
- (5) 新しいパソコンを買いたいように思うけど金がない。

指示の仕方について、従来は、大きく現場指示と文脈指示とに分けて論じられてきたが、本稿では、その立場はとらない。理由はふたつある。ひとつは、現場指示・文脈指示という用語が必ずしも明確に定義されておらず使いにくいものであるという消極的な理由である。もうひとつは、〈モノ指示〉と〈コト指示〉の区別、さらに〈コト指示〉の下位分類は、指示代名詞と指示副詞の差異を考察する際に有効と思われるという積極的な理由である。現場指示・文脈指示という用語の定義、および、指示語の用法をこの二用法のみに分けて論じることの是非等に関しては堀口和吉1978を参照されたい。

では、サの直下に用言がつくサ+自立語を例に、サの〈コトの様相的指示〉を具体的に見てみよう。

- (6) かぐや姫答へて奏す、「をのが身は、此国にむまれて侍らばこそ使ひ給はめ、いといておはしましがたくや侍らん」と奏す。御門、「などかさあらん。猶いておはしません」とて、御輿を寄せ給に、このかぐや姫、きと影になりぬ。(竹取・御門の求婚)
- (7) たより人に文つけてやりたりければ、「さいふ人も聞こえず」などいとはかなくいひつつ来けり。(大和・148段)
- (8) 世の中になほいと心憂きものは、人にくまれんことこそあるべけれ。誰てふ物狂か、我人にさ思はれんとは思はん。(枕草子・267段)

直下にくる用言は、「言ふ」「聞こゆ」「思ふ」などが多く、先行の発話のありようを指示するものが多い。「あり」がつく例も多く、その場合は、先行の行為のありようや状況などを指し示す。

直下に用言がつく場合ではないが、〈コトの様相的指示〉の分かり易い例をあげておく。

- (9) 「奏すべき事があ(ッ)て法住寺殿へ参る。やがてこそ参らめ」といひけれ共、「に(ッ)くひ入道かな、何事をか奏すべき。さなはいはせそ」とて、(平家・巻2)
- (10) 手づからひきさがし出でて見さわぐこそ、いとにくけれ。それを、「まな」ともとり隠さで、「さなせそ」「そこなふな」などばかり、うち笑みていふこそ、親もにくけれ。(枕草子・152段)

前者が発話のありようを、後者が行為のありようを、それぞれ指示したものである。

2.2 コソアドとの比較

前節では、サの指示の仕方について述べ、それを〈コトの様相的指示〉としたのであるが、以下では、コソアド研究で述べられてきたなわぼりや近・中・遠称といった観点をサの考察に加えてみる。まず、代名詞ソについて論じた井手至 1958 を引用し、なわぼりの観点でサを考えてみる。

先行の叙述内容を指示する文脈指示の代名詞としては〈ソ系〉が用いられる。論文・小説等の文章において、すでに表現された先行の叙述内容は、聞き手の諒解したのものとして、聴者の勢力圏内にある話材として意識され、また、会話の文章等において、既に表現された相手の発言内容は、相手つまり聴者の勢力圏内にある話材として把握されるために、(1) 同一文章中の先行の叙述内容と、(2) 相手の発言内容とは〈ソ系〉の他称の代名詞で指示されるのである。

なわばりの概念を文脈指示にもうまく適用したものといえよう。しかし、このような捉え方に対しては、堀口1978に異なる見解がある。

堀口1978から、注目すべき記述をいくつか拾いだしてみる。

- コ・ソ・アは、強烈指示の近称コ・遠称アと、平静指示の中称ソとからなる。
- ソ系は、話し手の自己に関わり弱いとする対象を平静に指示するものなのである。
- 文脈指示の用法には、後述するように、ソとしか表せないものもあり、一般にソが多用されるということは事実であろうが、それは、けっして、一度表現した話材は聞き手の領域に属するからなどではないはずである。文脈指示に聞き手の領域を設定するなどということは、無意味きわまることである。

以上は、主に代名詞ソについての論であるが、指示副詞サの考察にも大いに参考になろう。文脈指示(本稿での〈コトの様相的指示〉)のサに、聞き手の領域を設定する必要は無いと考えたい。なわばりの概念はサには適用不要ということであり、より正確に言えば、適用不可能ということである。サの実例のひとつひとつに聞き手の領域を設定するということは具体的に行える処理とは思えない。

では、近・中・遠称といった観点でみるとどうだろうか。井上1999はサを近・中・遠称にわけて実例を示し、以下のようにまとめている。

「さ」の指示する事態は、近・中・遠称のいずれでもありうるのである。それからすると、「さ」においては、近・中・遠称の区別は問題にならぬといえよう。ただし、中称の用例が多くみられるのは確かではある。

本稿も、サにおいて近・中・遠称の区別は問題にならないと考える。古代語において、指示副詞は、サの他にカクとシカとがあるが、これらはコソアドのように体系的なものではない。サ・カク・シカは近・中・遠称により区別されているのではないのである。これは、〈コトの様相的指示〉というものが、〈モノ指示〉にみられるような体系的性は必要としないということを意味しているものと思われる。よって、〈コトの様相的指示〉に、コソアド研究で論じられてきたなわばりや近・中・遠称といった観点を導入するのは、不相当であると考え。現時点では、堀口1978の指摘する〈強烈〉〈平静〉の観点で解釈した方がよりよいと思うが、この点に関しては、同じく指示副詞のカクやシカとの比較を通じて再考したい。

3 サ系連語

3.1 例外的サ系連語

サは資料に示したように様々な助辞を下接し、連語あるいは連語的語列を形成する。ここでは、その中で例外的な語列とみなされるサガ・サノ・サヲを取り上げる。サの指示性と関連づけて考察してみたい。

サガ

- (11) 「御迎へに来む人をば、長き爪して、眼をつかみ潰さん。さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。さが尻をかき出でて、ここのら公人に見せて、恥を見せん」(竹取・かぐや姫の昇天)

サの直下に格助詞ガが下接した例である。調査文献中でサガはこの2例だけである。このサは代名詞的に用いられている。ただし、代名詞的であるとはいえ、単なる〈モノ指示〉とはやや異なり、「そのような(かぐや姫を迎えに来るような)やつの髪／尻」というふうには、モノ(人物)をその様相を付加して指示しているように思える。いわば〈様相付随モノ指示〉とでもいえようか。サとガとの間に省略があるのかも知れない。憶測はいくらか浮かんでくるが、他に同類例が見られないのが問題であり、とりあえず、この2例は代名詞的指示詞サであると認定し、指示副詞サには含めないことにする。ちなみに多くの辞書でも、このサは代名詞として指示副詞サとは別に立項している。用例は諸辞書ともにこの竹取物語のものである。調べたなかでは、『岩波古語辞典補訂版』が「三人称の代名詞ソ・シと同根。」と解釈した上で、唯一指示副詞のサと同項目で説明していた。なお、異本では、「さが髪」の部分が、「さかしみ」、「さが尻」の部分が「さりしり」「さるしり」となっているものがある。これらによって、サガの存在の有無を論じるのは慎重にならなければならないが、仮にサガが存在したとしても、それが不適切な語法と判断された可能性があることは指摘できよう。

サノ

- (12) 「『この蔵を開けむ、開けむ』とし侍りつつ、『人の悪しくするを、我は、など開けざらむ』と、かつ倒れ伏せるを見つつ、年月を経てし侍りしほどに、皆死に侍りにき。させし人の家には、時のまつりこと起こりつつ、にはかに滅び侍りにき」と申せば、「いと恐ろしきことかな。『また、開くる人やある』と見侍れ」とて、御衣一襲脱ぎ給ひて、一つづつ賜ひつ。「この地の内に見ゆる屋のわたりに侍りて、『この蔵、人、また、さのごとするやある』と見侍れ。(宇津保・蔵開・上)

- (13) さるべき男どもは、懈怠なくもよほしさぶらはせはべるを、さのごとき非常の事のさぶらはむをば、いかでか承らぬやうははべらん、となん申させはべりつる。(源氏・浮舟)
- (14) 絶え間遠けれど、さのものとなりたる御文なれば咎なくて御覽せさす。(源氏・葵)

以上が今回確認したサノの全例である。注意すべきは、サがノを下接してはいるが、代名詞的には働いていないことである。(12)は、「さのごとする」全体で「葦を開けようとする」と解される。(13)は、「さのごとき」で相手の発言を指示し、「仰せのような」と解される。(14)は、「便りが久しく途絶えること」を「さのもの」で「そういうもの・そうであるもの」と指示している例。3例ともに、サがくモノ指示でないことは確かである。助詞ノは「まったくの」のように副詞にも自由に下接することができ、これらのノは格助詞というよりも指定辞的なものと解せよう。

サヲ

- (15) 「まろが文を隠し給ひける、また、なほあはれにうれしきことなりかし。いかに心憂くつらからまし。いまよりも、さを頼みきこえん」(枕草子・136段)

調査文献中で唯一ヲを下接したサの例であるが、サの指示性からしても、解釈からしても、このヲは格助詞ではないと判断する。間投助詞的なヲが、介入したものであろう。「大系本」の頭注にも「『さを』の『を』は、強意。」のようにある。「さを頼みきこえん」で「そのようにお頼み申しあげましょう」と解すべきで、「それをお頼み申しあげましょう」と解すべきではなかろう。もし、ヲを格助詞として「それを」と解釈するとサは代名詞的となり、〈コトの直接指示〉となる。なお、「さを」が「なを(猶)」となっている異本も存在する。サヲの語列の違和感を示すものといえるのではなかろうか。

以上、サの直下に格助詞かと思われるものが下接した語列をみたが、いずれもごく僅かしかみられないものであり、しかもノやヲを格助詞ではないと解釈することも可能である。基本的にサの直下には格助詞が下接しないということがいえよう。これは、〈コトの様相的指示〉のサにおいては当然といえる。

ここで扱った語列には異文の問題や時代的問題も関わってこよう。例外的サ系連語の多くは比較的古い時代に現れる。本稿では、時間の幅を比較的広くとった調査をしたが、調査文献中においてはサの指示性は一貫していると判断した。より詳しくみれば、細かな変化を見出すこともできるかもしれない。通時的考察は今後の課題としたい。

3.2 サ系連語の一語化

連語の一語化は語基の原義を残しているか否かで論じられることが多い。この観点は、例えば、複合動詞などの一語化に関しては、かなり有効であろう。しかし、サに関しては、この観点がうまく使えない。サの指示の具体性の有無、あるいは強弱などを考慮して、サ系連語の一語化を判断することが考えられようが、それはあまり有効ではない。なぜなら、サの指示性は〈コトの様相的指示〉であるからである。〈コトの様相的指示〉を、指示の具体性の有無、あるいは強弱といった観点から分析するのは非常に困難である。もし、原義を残しているか否かで論じるならば、サ系連語のサに〈コトの様相的指示〉機能がなくなっていることを示さなければならぬ。しかし、一部の連体詞的サ系連語を除けば、時代が下ってのサ系連語においてもそのことを示すのは難しい。

さて、上に、「一部の連体詞的サ系連語を除けば」と述べたが、サル・サルベキ・サリヌベキ・サルマジキ・サラヌ・サナラヌ・サスガノ・サシタル・サセル・サシモノなどは指示の仕方に関し、興味深い問題を提起する。これらの例の中には、サの〈コトの様相的指示〉機能を残していないと思われるものがある。これらは、名詞を後接するのであるが、その名詞がだんだんと限られてきて、同じパターンで連結がしばしば繰り返される。このことにより、連体詞的サ系連語と後接名詞が徐々に結び付きを強め、慣用句のように意識されるようになったのだろう。慣用句のように用法が固定化され、さらには、そこに、ある特定の意味が付加されていったのである。例えば、サルやサルベキに「しかるべき」とか「立派な」とかの意味が付加されている。これを〈実質概念性の付加〉と呼ぶ。

サ系連語のいくつかに認められる〈実質概念性の付加〉は、繰り返されるある表現が記憶の中に残ることにより生じるものであろう。サの指示の同定は先行するコトを参照して行われるのが本来であるが、〈実質概念性の付加〉したサ系連語の場合は、サの指示の同定の参照先を先行するコトには求められなくなる。指示詞からの脱皮である。語列から離れた別の一語として理解されるようになったといえよう。〈実質概念性の付加〉されたサ系連語は一語化しているとみなすべきである。

先にあげた連体詞的サ系連語の他に、副詞的サ系連語にも実質概念が付加していると判断されるものがある。サスガ(ニ)・サシテ・サバカリなどである。サスガ・サバカリは形容動詞のような振る舞いもする。

形容動詞的なサ系連語の代表はサヤウである。サヤウノ・サヤウニの形で多用される。サヤウニ全体でコトを様相的に指示していて、サの分析的表現のようで興味深い。他にサナリも形容動詞的サ系連語であるが、ほとんどが、一語文で用いられ、応答詞のようでもある。これは形容動詞から感動詞への転成として注目されよう。

以上、サの指示性の消失による〈実質概念性の付加〉という観点で、連体詞的・

副詞的・形容動詞的サ系連語の一語化を論じたが、以下では、山口堯二1981を参考に接続詞的サ系連語の成立に関して確認しておきたい。

「接続形式の分析化」を論じた山口1981には、接続形式の成立に関して、「前後両句の意味関係を何らかのかたちで示しうる」「先行する句的判断を前句として対象化しうる」というふたつの条件が示されている。サ系連語は、その語構成要素である〈コトの様相的指示〉のサが前文を対象化する機能を有していると解釈されるため、ひとつの条件を満たしていることになる。かくして、もうひとつの条件が満たされて接続形式として成立するか否かは、サに下接する言語形式の機能に委ねられるのである。さて、条件表現形式や接続助詞が前後両句の意味関係を示しうることは、いうまでもないことである。故に、語構成法に条件表現形式を持つサラバ・サリトモ・サレバ・サレド(モ)や接続助詞を下接したサテ・サリトテなどが、接続詞的語彙として働くのは当然であるといえよう。これをもって、接続詞的語彙の成立を認めるのである。なお、接続詞的語彙の中には、後続の文が省略され、感動詞的に用いられるものもまま見受けられる。接続詞から感動詞への転成の例である。

また、サルハは、サリの連体形準体法+係助詞ハから、補説・添加の接続詞的連語へ、さらには逆接の接続詞的連語へと変化したものとして注目される。

残るサ系連語はサに副助詞や係助詞や終助詞が下接したものである。サダニ・サシモ・サナガラ・サノミ・サバカリ・サマデ・サホド・サコソ・サゾ・サハ・サモ・サヤ・サナム・サカシなどがあげられる。このうち、終助詞が下接したサカシは一語文で応答詞として用いられる。サナムも一語文で用いられることが多い。

サダニ・サシモ・サナガラ・サノミ・サバカリ・サマデ・サホドなどはサとその被修飾語との間に、取り立ての副助詞が介入したものと解される。これらの副助詞は、その取り立ての職能により、サの〈コトの様相的指示〉機能と副詞性とを保たせる役割を担っていると解釈されよう。これらの連語は、比較的、結合度が弱い。

係助詞を下接するサコソ・サゾ・サハ・サモ・サヤなどの場合も、副助詞を下接するサ系連語とほぼ同様に捉えられるが、サハ・サハレ・サモなどは感動詞的にも用いられる。

以上をまとめると、サ系連語は下接する助辞によって、連体詞的・副詞的・形容動詞的・接続詞的・感動詞的になる。それらの多くは一語化してもサと助辞のそれぞれの機能をつよく残している。サに副助詞・係助詞が下接した語列は特にその傾向が著しい。

概して、サ類は一語化しにくいようである。それはサの修飾機能が表面化しているからであろう。一方、サリ類はサの修飾機能が具体的動作を表わさない存在詞アリで受け止められるために一語化しやすいのではないかと考える。

4 おわりに

本稿では、まず、サの指示性を〈コトの様相的指示〉とした。そして、コソアドとの比較を通じて、サになわばりや近・中・遠称といった観点を導入するのは、不適当であるとした。このことは、指示副詞と指示代名詞の差異に関わるだろう。次に、サ系連語について、例外的なサ系連語をサの指示性と関連づけて考え、最後に連語の一語化について考えた。一語化は、サの指示性の消失によって〈実質概念性の付加〉が生じたものと、サの本来の指示性を残したままで結合度を強めたものがあることをみた。後者については、品詞論的にみていった。サ系連語の中には、同じ語列で副詞的・接続詞的・感動詞的な振り舞いをするものが少なくない。いわゆる品詞の転成である。このようなものは一語と捉えた方がよいだろう。一方、同じ文献中の同形の語列でも、連語としてみるべきものと一語としてみるべきものがある。サに副助詞や係助詞が下接した語列はその典型的なものといえる。連語と一語とは連続するものであり、線引きはなかなか困難であるが、文中での働きにより判断すべきである。一語化には使用頻度も関わってくるだろう。使用頻度の高い語列は記憶の中に蓄積されやすいはずである。

サ系連語のうち一語化の度合の強いものは、文頭に位置することが多い。これらは、文のはじまりであることのマークとなっているのではなかろうか。特に会話文の冒頭に出現する場合が多い。個々のサ系連語については改めて論じるつもりであるが、サ系連語の研究は、会話文と地の文との区別にも役立つのではないかと思っている。今後の課題としたい。

参考文献

- 佐久間鼎 1936.5 「現代日本語の表現と語法」厚生閣
- 池上禎造 1947.2 「中古文と接続詞」『国語国文』Vol.15, No.12
- 原田芳起 1952.9 「上代語彙における「しか」と「さ」の交渉」『平安時代文学語彙の研究』風間書房
- 井手至 1958.5 「代名詞」『続日本文法講座1』明治書院
- 清水功 1974.3 「いわゆる副詞的指示語「か」「さ」について－指示体系変遷の考察の一環として－」『椋山女学園大学研究論集』No.5
- 北原保雄 1974.12 「陳述副詞と接続詞と感動詞と－その構文論的位置づけについて－」『文学・語学』No.74

- 堀口和吉 1978.9 「指示語の表現性」『日本語・日本文化(大阪外国語大学)』No.8・
金水敏/田窪行則編 1992.10 『日本語研究資料集第1期第7巻指示
詞』再録
- 山口堯二 1981.5 「接続形式の分析化—判断の対象化を中心に—」『国語と国文学』
Vol.58, No.5
- 近藤泰弘 1990.3 「構文的に見た指示詞の指示対象」『日本語学』Vol.9, No.3
- 吉本啓 1992.10 「日本語の指示詞コソアの体系」金水敏/田窪行則編 1992.10 『日
本語研究資料集第1期第7巻指示詞』(『言語研究』90(1986)に発
表した‘On Demonstratives KO/SO/A in Japanese’の日本語版
として、執筆したもの。)
- 井上博嗣 1999.6 「中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について
—源氏物語を資料として—」『女子大國文』No.125

【付記】

本稿は、国語学会平成八年度秋季大会における口頭発表の前半部に基づくものである。発表時、その前後に貴重なご教示をいただいた。記して感謝申しあげる。

『宇津保物語』と『源氏物語』の底本を変更したため、発表時と用例数が異なる。ちなみに、『宇津保物語』は前調査(大系本)ではサが全 1499 例であったが、今回は 1569 例確認された。「うつほ物語全」は前田家本を底本にしているが、かなり読みかえている。読みかえによって得られたサ系連語の中には『宇津保物語』にしかみられないものもあり、問題となる。この点も今後再考したい。

資料…サ系連語一覧表

- 次頁からの資料「サ系連語一覧表」は、サの直下に下接する語(助辞的なもの)によってサ系連語を分類し、文献別に用例数を示したものである。
- 小計 a は平安前期、小計 b は平安中期、中計は小計 a + b、小計 c は院政期、小計 d は中世、の用例数を合計したものである。
- 「サハ？」となっているのは、ハカバカ、不明なものがあるからである。
- 紙幅の都合上、総計で 10 例以下のものは、サ/サリ類少数例にまとめた。
- 補助資料として、それぞれのサ系連語の下位に分類される連語(あるいは語列)を用例数の多い順に示す。紙幅の都合上、文献別には示せない。
- 「サ系連語一覧表」の中のサ(+自立語)・サル(+自立語)は下位分類をしていない。サシテ・サセル・サカシ・サナム・サリヤ・サルハは下位分類が存在しない。

語彙	竹取	伊勢	土左	大和	大附	平中	落程	多武	宇津	小計a	蜻蛉	篋	枕
サ	1			5	1	8	25		189	229	24	1	47
ササ									2	2	7		
サシテ													
サスガ	3	4	1	3	3	4	15		14	47	5		21
サセル													
サヤウ	1	1					5		46	53	5	1	22
サナリ				1	1	2	6		17	27	13		10
サテ	5	12	5	45	13	50	40	9	328	507	84	4	64
サダニ									3	3	1		1
サシモ						1	4		19	24	4		24
サナガラ				1			1		18	20	10		2
サノミ	1			1		1			8	11	1		6
サバカリ	1			1			4		35	41	2		16
サマデ									5	5	2		1
サカシ							4		3	7			
サコソ		1			1	1	3	3	16	25	2		6
サゾ					1	1	1	1	25	29	3		9
サナム				3	3	3	3		8	20	4		7
サハ?	2			1	1	2	19	1	85	111	11		29
サモ	2	1		4		2	22	3	113	147	17	1	27
サヤ	1			1		2	2		7	13	1		2
サ類少数例					1		1		2	4		1	1
サリゲ							4		6	10	2		1
サル	5	8		7	2	2	25		151	200	9	2	56
サラズ		1					1	5	46	53	7	1	11
サラム									9	9	2		1
サリケリ		3		8	5	15			2	33	1		2
サリヌ							2		15	17	1		1
サルベシ				1		1	16		75	93	8		23
サルマジ							1		1	2	2		1
サルニ		2		1					3	6			
サリナガラ													
サリトテ	1	1				1	1		5	9			3
サリヤ													
サルハ			1				3		35	39	2		3
サラバ	3	1		2	3	9	13	1	92	124	13		12
サリトモ	2	1				1	6		48	58	7		8
サレド	2	5	1	5	1	2	5	2	69	92	10	1	40
サレバ	2	4	1	4	7	10	14		52	94	11		6
サリ類少数例		1							17	18	2		1
サ類合計	17	19	6	66	25	77	155	17	943	1325	196	8	295
サリ類合計	15	27	3	28	18	42	95	3	626	857	77	4	169
サ系合計	32	46	9	94	43	119	250	20	1569	2182	273	12	464

【ササ全13】ササノ8ササ4ササナム1

【サスガ全667】サスガニ566サスガ63サスガナル14サスガニテ7サスガナリ4サスガナレバ4サスガニゾ2サスガナリケリ1サスガナリケルガ1サスガナルゾ1サスガナルヲ1サスガナンメリ1サスガニコソ1サスガニシモ1

【サヤウ全503】サヤウノ212サヤウニ139サヤウナル37サヤウナラム20サヤウニテ20サヤウニモ18サヤウニハ15サヤウニゾ6サヤウニテモ6サヤウニナム5サヤウニヤ4サヤウニコソハ3サヤウナルニ2サヤウニコソ2サヤウニテハ2サヤウダチタル1サヤウナラバ1サヤウナラムコソハ1サヤウナルニヤ1サヤウニテナム1サヤウニテモヤ1サヤウニノミ1サヤウニモヤ1サヤウニヲ1サヤナル1サヤニテコソ1サヤノ1

【サナリ全147】サナメリ21サニヤ17サナナリ14サナリ14サニコソ13サニコソハ13サニ11サニハ11サナラヌ7サナリケリ7サナラム5サナラデモ2サナル2サニゾ2サナラズハ1サナリサナリ1サナリタルベシ1サナルベシ1サナンナリ1サニテモ1サニモコソ1サニモヤ1

語彙	源氏	和泉	紫式	栄花	堀中	更級	浜松	寝覚	狭衣	小計b	中計	法華	打聞
ササ	1						1	2		11	13		
サシテ	10			1				3		14	14		
サスガ	279	1	4	32	11	6	45	48	57	509	556		
サセル	1									1	1		
サヤウ	144	2	1	68	1	1	22	6	54	327	380		1
サナリ	15	1	1	3	1	1	5	13	12	75	102		
サテ	208	7	4	239	8	6	37	69	74	804	1311	5	17
サダニ	3			1	1		2	5		14	17		
サシモ	113	3	2	14	1		11	5	32	209	233		
サナガラ	13			11			1	3	4	44	64		
サノミ	25	1	1	12	1	2	9	21	23	102	113		
サバカリ	106	1	4	29	1	1	51	60	60	331	372	3	
サマデ	19		1	1	1	1	3	8	16	53	58		
サカシ	12						1	1	1	15	22		
サコソ	39	1	2	10	1	1	14	14	13	103	128	1	
サゾ	10	4	1	3	1		7	7	7	52	81		
サナム	25						5	1		42	62		
サハ?	74	9	2	80	3	6	23	68	43	348	459		4
サモ	149	5	5	37	2	1	18	32	35	329	476	4	1
サヤ	4	1		4		2	2	3		19	32	2	
サ類少数例	2			1	1	1			2	9	13		
サリゲ	20	1	2	6	2		13	44	4	95	105		
サル	316		9	60	4	3	43	53	41	596	796		1
サラズ	34		1	39	3		11	24	27	158	211		2
サラム	1			1				1	1	7	16		
サリケリ							1			4	37		
サリヌ	18	1	1	1	2		1	3	8	37	54		
サルベシ	266	2	6	349	8	11	52	55	50	830	923		
サルマジ	23		1	3				1	4	35	37		
サルニ	5			2		1	1	2	1	12	18	1	
サリナガラ	1						1			2	2		
サリトテ	39	4	2	23	3	2	16	17	26	135	144		1
サリヤ	11	1							1	13	13		
サルハ	59	2	5	23	1			4	15	114	153		
サラバ	77	2	1	14	12	1	8	24	36	200	324	5	1
サリトモ	104	4	1	41	4	3	23	31	41	267	325	1	
サレド	80	1	7	89	1		2	5	37	273	365	1	1
サレバ	49	1	2	33	1		11	18	24	156	250	5	9
サリ類少数例	5						1	3		12	30		1
サ類合計	1317	37	30	573	40	32	273	400	446	3647	4972	17	28
サリ類合計	1108	19	38	684	41	21	184	285	316	2946	3803	13	16
サ系合計	2425	56	68	1257	81	53	457	685	762	6593	8775	30	44

【サテ全2287】サテ 1561 サテモ 375 サテハ 186 サテコソ 30 サテナム 13 サテノミヤハ 13 サテシモ 12 サテサテ 10 サテノミ 10 サテヤ 10 サテソ 7 サテノミハ 7 サテモヤ 7 サテノ 6 サテモサテモ 6 サテコソハ 5 サテダニ 5 サテノミモ 3 サテシモコソ 2 サテノミナム 2 サテノミヤ 2 サテヲ 2 サテカシ 1 サテシモヤハ 1 サテシモヤハニテ 1 サテソカシ 1 サテソモヤハナレバ 1 サテダニコソ 1 サテノミコソ 1 サテバカリコソ 1 サテバカリソ 1 サテモコソ 1 サテモヤハ 1 サテヤハ 1 サテヨリ 1

【サダニ全22】サダニ 20 サダニモ 2

【サシモ全292】サシモ 280 サシモヤハ 7 サシモノ 2 サシモヤ 2 サシモコソ 1

【サナガラ全110】サナガラ 105 サナガラナム 2 サナガラモ 2 サナガラナリケリ 1

【サノミ全155】サノミ 70 サノミハ 27 サノミヤハ 17 サノミコソハ 11 サノミモ 11 サノミコソ 10 サノミソ 4 サノミハニテ 3 サノミシモハ 1 サノミナム 1

言葉	今昔	古説	大鏡	小計c	方丈	発心	宇治	平家	徒然	増鏡	小計d	総計
サ	1	5	14	27		4	19	26	1	2	52	544
ササ												13
サシテ						5		2	1		8	22
サスガ		5	11	16		30	7	42	3	13	95	667
サセル	7	1	4	12			7	12	3	1	23	36
サヤウ	44	5	15	65		21	5	20	6	6	58	503
サナリ	31		2	33			5	1	2	4	12	147
サテ	366	38	91	517		62	185	143	16	53	459	2287
サダニ	3		1	4				1			1	22
サシモ		1		1	1	9		43		5	58	292
サナガラ	2	2	5	9	2	10	5	6	3	11	37	110
サノミ	2	3	3	8	1	2	3	7	5	16	34	155
サバカリ	46	3	23	75		7	7	11	8	7	40	487
サマデ	5	1	6	12		1	4		1	2	8	78
サカシ												22
サコソ	10		5	16		8	2	49	3	14	76	220
サゾ	4	1	6	11		2	3	4	1	3	13	105
サナム	1	1		2						1	1	65
サハ?	50	17	15	86			28	17	4	6	55	600
サモ	39	3	20	67		3	21	14	9	5	52	595
サヤ	2			4			2		1		3	39
サ類少数例						6	3	1	1	2	13	26
サリゲ	3		2	5		3	6			1	10	120
サル	96	8	46	151		17	53	136	14	13	233	1180
サラズ	4		13	19		2	3	14	4	5	28	258
サラム	5		2	7			1	7			8	31
サリケリ							1				1	38
サリヌ		1		1				2	1	3	6	61
サルベシ	16	6	41	63	1	27	13	6	4	16	67	1053
サルマジ			1	1								38
サルニ	8	2		11		2	2	4			8	37
サリナガラ			1	1			3	11	1		15	18
サリトテ	33	5	7	46		4	13	5	1	1	24	214
サリヤ			1	1								14
サルハ	2		8	10			2		2	3	7	170
サラバ	151	6	7	170		20	42	72	3	1	138	632
サリトモ	23	5	15	44		5	10	12		8	35	404
サレド	58		26	86	2	25	14	64	6	8	119	570
サレバ	745	11	48	818	1	13	58	110	19	6	207	1275
サリ類少数例	7	1	1	10			2		2		4	44
サ類合計	613	86	221	965	4	170	306	399	68	151	1098	7035
サリ類合計	1151	45	219	1444	4	118	223	443	57	65	910	6157
サ系合計	1764	131	440	2409	8	288	529	842	125	216	2008	13192

【サバカリ全 487】 サバカリ 315 サバカリノ 107 サバカリニ 13 サバカリニテ 6 サバカリモ 5 サバカリニコソ 4
 サバカリニテハ 4 サバカリニヤ 4 サバカリコソハ 3 サバカリゾ 3 サバカリダニ 2 サバカリナラム 2 サバカリナル
 2 サバカリニコソハ 2 サバカリニハ 2 サバカリコソ 1 サバカリダニゾ 1 サバカリナナリ 1 サバカリナメリ 1 サバ
 カリナラバ 1 サバカリナラムゾ 1 サバカリナリシ 1 サバカリナルニ 1 サバカリニテコソハ 1 サバカリニテモ 1
 サバカリノミ 1 サバカリハ 1 サバカリラ 1

【サマデ全 78】 サマデ 42 サマデハ 21 サマデモ 9 サマデノ 3 サマデヤハ 2 サマデモヤ 1

【サコソ全 220】 サコソ 140 サコソハ 79 サコソナレド 1

【サゾ全 105】 サゾ 92 サゾカシ 11 サゾカシサゾカシ 1 サゾナ 1

【サハ?全 600】 サハ? 509 サハ?レ 79 サハ?レヤ 6 サハ?レカシ 3 サハ?レイ 1 サハ?レサハ?レ 1 サハ?カシ 1

【サモ全 595】 サモ 506 サモヤ 60 サモコソハ 14 サモコソ 13 サモゾ 1 サマレ 1

【サヤ全 39】 サヤハ 22 サヤ 17

【サ類少数例全 26】 サシタル 8 サカ 3 サノ 3 サホド 3 サホドニ 3 サホドノ 3 サムハ?レ 1 サヨサヨ 1 サラ 1

【サリゲ全120】サリゲナクテ 43 サリゲナク 41 サリゲナウ 8 サリゲナキ 6 サリゲモナク 5 サリゲナウテ 3 サリゲナクテヲ 2 サリゲモナクテ 2 サリゲナクコン 1 サリゲナクテナム 1 サリゲナクテノミ 1 サリゲナケレド 1 サリゲナケレバ 1 サリゲナレ 1 サリゲニヤハ 1 サリゲモナカリキ 1 サリゲモナカリツルモノヲ 1 サリゲモナキ 1

【サラズ全258】サラヌ 97 サラズハ 37 サラデモ 25 サラズトモ 18 サラデハ 13 サラヌダニ 13 サラデ 11 サラデダニ 10 サラヌモ 8 サラヌハ 5 サラザラム 3 サラザラマシカバ 2 サラデコン 2 サラヌコン 2 サラヌマデモ 2 サラザラムニテダニ 1 サラザラムニテモ 1 サラザリシ 1 サラザリセバ 1 サラズモ 1 サラデノ 1 サラヌガ 1 サラヌヲバ 1 サラネド 1 サラネバ 1

【サラム全31】サラム 22 サラムニ 5 サラムニハ 2 サラムカシ 1 サラムヲバ 1

【サリケリ全38】サリケレバ 23 サリケル 7 サリケレド 4 サリケリサリケリ 1 サリケルナメリ 1 サリケルニ 1 サリケルヲ 1

【サリヌ全61】サリヌベキ 33 サリヌベカラム 8 サリヌベクハ 8 サリヌベク 4 サリヌベクヤ 2 サリヌベシ 2 サリヌベカラムヤ 1 サリヌベキガ 1 サリヌベキコン 1 サリヌベキモ 1

【サルベシ全1053】サルベキ 717 サベキ 120 サルベキニヤ 27 サルベカラム 25 サルベキニコソ 20 サルベク 19 サルベキニコソハ 17 サルベキニテ 15 サルベキニモ 8 サベイ 6 サルベウ 6 サルベキニ 6 サルベクテ 6 サベウ 5 サルベキハ 4 サルベクハ 4 サルベキニテコン 3 サルベクモ 3 サルベシ 3 サベキニコソ 2 サベク 2 サルベキナメリ 2 サルベキニハ 2 サンベキ 2 サベウコン 1 サベウテ 1 サベキナメリ 1 サベキナメリケリ 1 サベキニコソハ 1 サベキニテ 1 サベキニハ 1 サベキニモ 1 サベキニヤ 1 サベシ 1 サルベウモ 1 サルベカラズハ 1 サルベカリケル 1 サルベキガ 1 サルベキノ 1 サルベキノヤ 1 サルベキナラデ 1 サルベキナリ 1 サルベキナレド 1 サルベキニテコンハ 1 サルベキニテノ 1 サルベキニテヤ 1 サルベキニヤハ 1 サルベキモ 1 サルベキヤ 1 サルベクテコン 1 サルベクテコンハ 1 サルベクヤ 1 サンベカラム 1

【サルマジ全38】サルマジキ 31 サルマジキニ 2 サルマジウハ 1 サルマジカラム 1 サルマジキニコソハ 1 サルマジキヲモ 1 サルマジク 1

【サルニ全37】サルニテモ 18 サルニ 7 サルニテハ 6 サルデハ 1 サルニコソ 1 サルニテコン 1 サルニテコンハ 1 サルニハ 1 サルニヤ 1

【サリナガラ全18】サリナガラ 9 サリナガラモ 9

【サリトテ全214】サリトテ 172 サリトテハ 18 サリトテモ 18 サリトテヤハ 4 サリトテサリトテ 1 サリトテノミヤハ 1

【サラバ全632】サラバ 623 サラバコン 4 サラバシモ 2 サラバサラバ 1 サラバソ 1 サラバヨ 1

【サリトモ全404】サリトモ 400 サリトモサリトモ 3 サリトモノ 1

【サレド全570】サレド 403 サレドモ 167

【サレバ全1275】サレバ 1039 サレバコン 113 サレバヨ 104 サレバニヤ 7 サレバコンハ 6 サレバヤ 2 サレバサレバ 1 サレバナム 1 サレバナリ 1 サレバヨナ 1

【サリ類少数例全44】サリ 9 サラナリ 6 サルヲ 5 サリシ 3 サリケム 2 サメリシ 1 サラジ 1 サラマシカバ 1 サリキヤ 1 サリケムカシ 1 サリケムモノヲ 1 サリケム 1 サリシカド 1 サリシカバ 1 サリツ 1 サリナム 1 サルカラ 1 サルナメリ 1 サルナラム 1 サルナル 1 サルメリ 1 サルモ 1 サルラム 1 サレ 1

(すずき よしあき・東京都立大学大学院生)